

庭園（放生池、弁財天）

永観堂の庭の中心にある放生池には、鯉などの魚が生息している。魚は、あらゆる種類の佛教に共通する単純な倫理規定である五戒によって保護されている。五戒の最初のもものは、非暴力（サンスクリット語でアヒンサー）で、いかなる生物にも害を与えることを禁じる戒めである。さらに菜食主義の食事を維持し、他の生き物に害を及ぼす行動を回避する。永観堂の僧達は、毎年9月初旬に開催される「放生会」と呼ばれる特別な儀式でこの戒律を誓う。放生会の儀式は文字通り「生命を解放する儀式」を意味し、すべての生命の重要性を尊重する方法として、魚が池に放流される。各佛教宗派でいろいろな形式で実践されており、その歴史は日本では少なくとも8世紀まで遡ることができる。

石橋は池を越えて「弁天島」に通じている。小さな島には、ヒンズー教の女神で水、智慧、音楽に関係のある弁天（日本語：弁財天）の弁天社がある。弁財天は佛教に関係付けられ、後に神道の風習に取り入れられた。神社の前には十のバケツが積み重ねられており、弁財天の名前が水に関係していることを伝えている。

この神社は1866年に、永観堂に短期間住んでいたことが知られている歌人で陶芸でも有名な芸術家である尼僧大田垣蓮月（1791～1875）によって寄贈された。神社の名前が刻まれた注連縄の上にある額装された銘板は太田垣蓮月によって書かれたものである。

放生池の周辺は、秋になると特に美しく、周囲のもみじが水面に映えている。